

## 書評 Book Reviews

□村上義千代 (文・写真) : あおもり まち野草  
Yoshichiyo MURAKAMI: **Aomori Machi-Yaso**  
A4変型版 (210 × 210 mm). 329 pp. 2019. 東奥日報社.  
¥2,500 + 税. ISBN 978-4-88561-255-8.

青森市や弘前市など、青森県の町中に野生状態で生える 309 種の草本の写真と撮影された植物の特色、撮影地の状況、和名の由来などについての簡素な解説からなる。その母体となったのは東奥日報という青森県の新聞に 200 回にわたり連載された記事で、本書ではそれらに新たに 109 種が追加された。

本書がよくある野草本と異なるのは、掲載された植物はすべて標本にされ、それを地元の「津軽植物の会」木村 啓会長が同定していることである。またその配列を米倉浩司著『日本維管束植物目録』に準拠していることを含め、植物学からみて逸脱する記述がない点も評価に値する。こうした科学性は著者が東北大学理学部で生物学を学んだことも無関係ではないだろう。

表題の「まち野草」は、市街地に生える野草を意味しているが、帰化植物のほか、少数ながら逸出した園芸植物も含まれている。記述は平易だが、生育場所の状況を彷彿とさせる臨場感のある撮影場所の説明から始まり、類似種の紹介と区別、和名や漢字表記とその由来、歴史上の逸話などと多岐にわたる。ムラサキツユクサでは高校や大学での実習から、植物の細胞構造などにも話題が及ぶが、そればかりでなく子供らがつぶした花びらに水を加えて色水を作り遊んだことも紹介する。

どの記事も読みでがあり興味深い、あえて本書を紹介した理由は別にある。それは撮影の際のカメラアングルが捉えた画像の意外性である。本書での著者は地際すれすれの位置から上方に向け植物を撮影している。そうすることによって通常私たちが撮影するアングルからでは得られない、植物のあり様を捉えるのに成功している。茎の分枝の状態がよく見えるだけでなく、そうした位置からみたイネ科やカヤツリグサ科の植物には系統的にも近いヤシ科の植物を彷彿とさせるものがある。いままで他書ではあまり見かけなかったアングルだが、すべてではないにしろ植物の全形の他、分枝などの特徴を捉えるのに試みる価値がありそうだ。多くの愛好家の方にお勧めしたい一書である。

(大場秀章 Hideaki OHBA)

□茨木 靖, 木場英久, 横田昌嗣 : 南のイネ科ハンドブック Yasushi IBARAGI, Hidehisa Koba and Masatsugu YOKOTA: **The Handbook of Grasses of Southwestern Japan** 新書版. 120 pp. 2020. 文一総合出版. ¥1,800 + 税. ISBN 978-4-8299-8135-1.

2011 年に同社から出版された「イネ科ハンドブック」(茨木ほか 2011) の姉妹編で、屋久島以南の南西諸島産の 89 種類のイネ科植物が原寸大の花序のカラー画像と全体の縮小画像、小穂の拡大画像の組み合わせで表現されている。掲載種は、南西諸島で普遍的に見られる雑草的なものを中心に、イリオモテガヤやオオマツバシバなど南西諸島固有種、イネガヤ、アオシバ、イゼナガヤやヒメカモノハシなど日本での産地が極限されているもの、ムラサキタカオススキやススキメヒシバ、ヒメオニササガヤのように日本での帰化が南西諸島にほぼ限られる外来種、栽培植物サトウキビなど、南西諸島のイネ科植物相を特徴付けるものが選ばれている。本編の前に、横田氏による「南の植物相と植生」と茨木氏による「南のイネ科植物の見どころ」という 2 つの総説があり、特に後者はイネ科への愛にあふれる内容となっている。それに続く種の検索表は、先に出版された「イネ科ハンドブック」の掲載種も含んだ包括的な内容のものとなっている。

南西諸島のイネ科植物相は、茨木氏も「南のイネ科植物の見どころ」に書いているように本土とはかなり毛色の異なるものが多く、同定のための良書も少ない。1987 年に小山鐵夫氏が出版した **Grasses of Japan and Its Neighboring Regions – An Identification Manual** は、南西諸島産の種も含めて包括的に記述され、また上記の南西諸島を特徴づけるイネ科植物も多く図示されていて便利であったが、出版時の事情から内容に古さが目立つのが難であった(本誌 65 巻 p. 288 の津山 尚氏による書評も参照されたい)。本ハンドブックは、近年になって侵入した多くの外来雑草も含んだ南西諸島のイネ科植物の同定を容易にするために準備されたものであり、南西諸島のイネ科に不慣れな本土の人でもこれらをより身近に感じることができると内容となっている。

サイズやページ数の関係で掲載種数の制限は避けられなかったにせよ、沖縄島を中心に比較的よく見られるヒメキビ、ニクキビモドキ、クサビガヤは個人的には載せてもらいかったところである。

p. 74の「カモノハシガヤ」はカモノハシガヤではなくむしろp. 79と同じヒメオニササガヤではないかと思われる。茨木氏も書いている通り、南西諸島のイネ科植物には在来外来を問わずまだ分類学的に検討すべき課題も多く、本書の出版を機により深いレベルでこの地域のイネ科植物への理解が深まって研究が進むことを期待したい。

(米倉浩司 Koji YONEKURA)

□小林史郎：土佐の植物暦 Shiro KOBAYASHI: **Monthly Wild Flowers in Tosa** A5判. 220 pp. 2020. 高知新聞総合印刷. ¥1,800 + 税. ISBN 978-4-010284-00-2.

2019年に南谷忠志「宮崎の植物方言と民俗」(鈺脈社 ISBN978-4-86061-732-5)が出版され、巻頭言を書かせていただいた。本書の「植物暦」というタイトルから、そのような人間の生活に沿った内容かと思ってページをめくったら、2月から順に毎月の植物の紹介だった。高知新聞夕刊に11年3029回に渡って連載した記事がもとになっているということで、それだけの連載を続けることができた著者の植物知識と体力・気力にまず圧倒されつつ読み始める。2月のホトケノザに始まり翌年の1月のシモバシラまで、1ページに基本的に3種類の植物が、写真1点と、和名、学名、科名、植物のくらし、分布、案内文で紹介されている。主要な記述である案内文は簡潔かつ親しみやすいものである。一月の中の植物の配列基準は説明されていないが、現地の植物をよく知っている小林ワールドなのであろう。抵抗なく進んでいける。また、どこから見始めても楽しく読める。

本書のような地域の植物を紹介する単行本は間断なく各地で発行されていると言ってよいだろう。特にカラー印刷費が下がり、出版が手軽にできるようになってから、カラー写真が多数掲載されるようになった。また、同様の内容のホームページが公開されている例も数多い。それらを読み、見ることは二重の楽しみがある。ひとつは、分布が狭く珍しい種類を写真で見たり、普通種であっても掲載された写真に地域的な変異を見たり、めったに気づかないような特徴を目にすることである。このことは以前から、ハーバリウムを探索することには現地調査に優るとも劣らない意義がある、と言われていることと共通しているように思う。も



うひとつは、説明文によってこれまで知らなかったことに気づいたり、写真をより深く見ることができたりすることである。そうした写真や文章の奥深さは著者の個性を表しており、本書については小林ワールドと表現するのが適当だろう。読者はワールドに滞在し、一般的な情報ばかりではなく、著者がこっそり漏らしてくれた秘密を見出して喜ぶ。さらに、著者のワールドを受け入れるだけでなく、隙があれば写真同定の間違いを指摘したり、著者がまだ発見していなさそうなことを発見したりして、こちらにもワールドがあるぞと主張する楽しみもある。オトギリソウの黒線をつぶすと赤い汁がでることは知らず、イヌビワとイヌビワコバチの生活史やハマナタマメの花形の変異を再確認。筒口が太いモミジカラスウリのポリネータはキカラスウリと同じスズメガなのだろうか、とか、高知県にはツクシハギが多いというがビッチュウヤマハギはどうだろうか、とか、その他恥ずかしいのでここに書けない疑問もあれこれ湧いて来て、本書の小林ワールドは、まだしばらく楽しめそうである。(邑田仁 Jin MURATA)